



Title	中国新疆ウイグル自治区における不就学問題と親の意識：南新疆の実態
Author(s)	瑪依拉, 買買提; MAMAT, Mahira
Citation	教育福祉研究, 9, 137-148
Issue Date	2003-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28365">https://hdl.handle.net/2115/28365</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P137-148.pdf



# 中国新疆ウイグル自治区における不就学問題と親の意識 —南新疆の実態—

マイラ メメティ  
瑪依拉 買買提

## はじめに

広大な領域をもつ中国は、人口の圧倒的な多数を占め国家の主導的立場にある漢民族のほか、56の「少数民族」からなる多民族国家である。とくに辺境部には、ウイグル自治区、チベット自治区など、少数民族が多く居住する地域が広がっており、そこに住む少数民族の多くは農民である。

本研究が対象とする新疆ウイグル自治区は自治区全体人口のうち46.1%がウイグル人で占められ(800万人)、ウイグル語という独自の言語と文化、そしてイスラム教が支配的な地域である。かつてウイグルではオアシス地域ごとの固有に社会規範や宗教に基づいた法律があり、外部からの影響が比較的少ない環境の中で、イスラム教が家庭教育や道徳の基礎となり、子どもたちの心身の発達に大きな影響を与えていた。

しかし中華人民共和国の成立後、土地改革・人民公社化・文化大革命といった社会変動、さらに漢民族の大量移民政策による漢文化や外来文化の影響によって、半世紀の間ウイグル社会は大きな変容を余儀なくされ、社会構造も激変してきた。とくに「改革・開放」政策は「社会主義市場経済」への適応をウイグル人にも迫るものであり、固有の伝統社会を持っていたウイグル社会には大きな混乱が生じ、中国沿岸部との経済的格差はますます拡大した。

1986年、中国では義務教育制度が施行されたが、義務教育は有償であり、上記のような背景をもつ新疆ではウイグル民族の義務教育の実施が大きな問題となった。学校教育への適応は、新疆地域やウイグル人の将来を考慮したとき、もっとも重要な課題である。新疆においては、二つの言語

の使用問題が学校教育に絡んできているために、現実には複雑なものとなっている。この問題は、ウイグルだけでなく、世界中で難題となっているマイノリティ教育問題の典型の一つでもあり、まさにマイノリティ民族の貧困問題と密接にリンクした政治、経済、社会的問題としての教育問題であるともいうことができる。

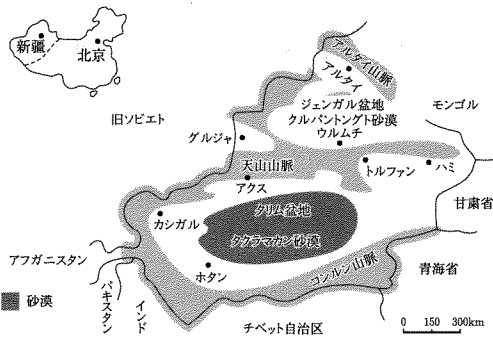
本論文では以上のような状況を前提に、人口の多数がウイグル人で占められている南新疆地域の、「子どもの学校教育」をめぐるウイグル民族の親の行動と意識の現状を明らかにしていく。南新疆地域では、小学校への入学率は95%以上に達しているものの、卒業時には50%~60%の児童しか残っていない<sup>①</sup>。また、小学校の卒業生のうち、中学校へ進学するものは半数に留まっている。このような状況の中で「子どもの不就学」という現実、親にどのように意識されているのだろうか。また子ども自身は学校に行っていないことをどのように考えているのだろうか。

本論文では、漢民族とは異なった面をもつウイグル民族の親の「子どもの教育」に関する行動と意識を、ウイグルの貧困の現状、歴史的な文化、産業のあり方、階層分化を帯びつつある家族経済の状況などから分析する。さらに、これらの点について南新疆で行った現地調査に基づいて検討していく。

## 1. 新疆ウイグル自治区社会の構造的特徴と人々の意識

### (1) 地理的位置

新疆は中国の西北に位置し、面積は160万平方キロで中国最大の省区である。北東から南西までモンゴル、ロシア、カザフスタン、キルギス、タ



新疆ウイグル自治区地図

ジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インドなどの国々に接しており、国境線の長さは5000キロにも及んでいる。全国国境線の総延長の四分の一を占め、国境線が国内最長の省区となっている。

新疆ウイグル自治区の地図を見ると、山脈と砂漠が中心的环境となっている。新疆の中部にそびえ立ち東西に連なる1700キロの天山山脈は新疆を二分する境目となり、その南は南新疆、北は北新疆と呼ばれ、いわゆる「三山夾兩盆」という輪郭を形成している。

## (2) 社会経済

新疆ウイグル自治区など中国内陸部の経済は、経済特別区や沿海部に比べ、10年も遅れている。実際、80年から94年までの15年間のGNPの年平均増加率は東南沿海部が19.8%、西部が15.7%であり、85年から94年の10年間の間の工業生産増加率は東南沿海部が1.42%、西部は1%であった<sup>(2)</sup>。こうした「東西格差」の中でも、新疆の経済発展は特に遅れている。

中国全体から見れば新疆自体も貧困地域であるが、自治区内においては、南部のウイグル地域の貧しさが目立つ。それは新疆ウイグル自治区の経済重心がウイグル自治区におかれていなかったからである。いわゆる経済ベルトは、面積15万平方キロで新疆全域の9%に過ぎないが、自治区の石油、化学、石炭、電力、衣料品製造、建築材料製造、機械製造工業のほとんどがここに集中し、国民総生産、工業総生産、国民所得のいずれも新

疆の60%以上を占める。そのため、こうした開発からとり残されたウイグル自治区では自然経済と伝統農業の比重がなお大きい。

## (3) 新疆を取り巻く環境と農業の特徴

新疆における農業はオアシス農業であり、厳しい水利条件の制約下にあるが、人口と食糧需要の増大を背景として、生産性を一層向上させることが求められている。しかしこのことが多くの地域で土壌の劣化・砂漠化をもたらすなど、水土環境に深刻な問題を引き起こしている。特に大規模な灌漑農業は生産の大幅な向上をもたらしたが、その陰で進行した環境の悪化は農業自体を持続させる上で脅威となっている。新疆の水資源は地表水、地下水と氷河に分かれている。地表水は河川と自然湖であるが、河川水の水源の多くは高山の積雪や氷河の融解水であり、季節や天候によって水量が著しく変化する不安定なものである。したがって新疆の農業にとって最も重要なのは灌漑用水である。

新疆の農業は、オアシス農業である。新疆の面積は広大だが砂漠地帯、山地、荒野などの不毛地帯が多く、農業用水を確保できる一部のオアシス地帯、灌漑水の得られる地域でしか農業は行われていない。また、山々が多いことから同地域では遊牧に適した草原地帯が多く存在し、牧畜業も同地域の中心産業である。

新疆の総面積は166万平方キロもあるが、砂漠が広いため、実際に農業・工業と建設用地として利用できるのは38.4%である。そのうち、農地面積は366.85ヘクタールで、総面積の2.21%に過ぎない。特にウイグル人が集中する新疆ウイグル自治区南部では農民1人当たりの農地占有面積が少なく、しかも年々減少する傾向にある<sup>(3)</sup>。

## (4) 新疆の人口変動と民族構成および宗教

新疆はウイグル、漢族、カザフなどの13民族を自治区の主な民族としている。表1は、新疆の人口と民族構成について1953年から2000年までの新疆人口の全体の変動を表したものであるが、漢民族移民の増加が新疆地域社会全体の構造を変化させてきたことが読み取れる。また、このよう

表1 新疆ウイグル自治区民族別人口（1953-2000年）

	1953年	1964年	1982年	1990年	2000年
自治区総人口（人）	4,783,603	7,270,067	13,081,633	15,156,883	17,915,459
%	100	100	100	100	100
漢民族（人）	332,126	2,321,216	5,286,537	5,695,409	7,023,910
%	6.5	31.9	40.4	37.6	39.0
少数民族総人口（人）	4,451,477	4,948,851	7,795,101	9,461,474	10,964,900
%	93.1	68.1	59.6	62.4	61.0
ウイグル族（人）	3,607,609	991,577	5,949,655	7,191,845	8,256,661
%	75.4	54.9	45.5	47.5	46.1
カザフ族（人）	506,390	489,126	903,335	1,106,271	1,277,474
%	10.6	6.7	6.9	7.3	7.1
回族（人）	134,215	264,017	570,789	682,912	813,023
%	2.8	3.4	4.4	4.5	4.5
モンゴル族（人）	58,346	70,747	117,460	138,021	156,892
%	1.2	1.0	0.9	0.9	0.9
キルギス族（人）	70,928	69,576	112,973	141,840	159,584
%	1.5	1.0	0.9	0.9	0.9
シボ族（人）	12,738	17,125	27,364	33,228	39,238
%	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2
タジク族（人）	14,460	16,231	26,484	33,197	39,642
%	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2
ウズベク族（人）	13,580	7,683	12,433	14,715	13,198
%	0.3	0.1	0.1	0.1	0.1
タタール族（人）	6,992	2,281	4,106	4,912	4,695
%	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
ロシア族（人）	22,166	1,191	2,662	8,065	10,598
%	0.5	0.0	0.0	0.1	0.1
ダフル族（人）	1,968	2,720	4,370	5,405	6,405
%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
満族（人）	1,163	2,909	9,137	18,585	22,329
%	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1

注1) 『新疆統計年鑑』1991年、中国統計出版社、『同』1995年84-90頁、『同』2000年、108-113頁より作成。

な人口の移動は、地域の民族構成を変化させるだけでなく、その地域の民族関係にも変容を及ぼしてきたと考えられる。

すでに述べたように、南新疆はウイグル族の80%が居住し、伝統的なオアシス灌漑農業とイスラム文化を持つ地域となっている。それに対し北新疆は漢民族の73%が居住し、発展した都市経済と多元的文化を持ち、新疆の社会、経済、政治の中心的な位置を占めている。

## 2. 新疆ウイグル自治区における現代教育

### (1) 教育水準の動向

中国成立後、ウイグルの教育、特に初等教育は著しく発展して、相当の成果を収めてきた。建国当時と比べると、学校教育は大きく普及し、量的にも質的にも一定の水準に達している。初等、中等教育の教授言語の中心はウイグル語であり、高等教育では漢語を中心とする学校教育体系が形成

されている。

表2からは、新疆ウイグル自治区人口の教育水準は1990年から2000年の間に一定の成果を収めてきたことがわかる。

中国では「改革・開放」のもと急速な経済発展が続いているが、こうした動向は同時に、中国における地域格差を急速に拡大させ、教育にも影響を与えている。新疆内においても、都市と農村の間には極めて大きな教育格差が生まれた。表3は全新疆の教育水準を3つの地区に分けたものであるが、南新疆の教育水準は他地区にくらべて低いことがわかる。

### (2) 「民族学校」及び進学動向

中国新疆ウイグル自治区における少数民族教育は初等教育の段階から行われている。民族教育とは、漢語（中国語）以外の言語、つまり少数民族それぞれの言語による教育である。

新疆では、各少数民族を児童・生徒とし、民族言語を教授言語とする学校のことを「民族学校」と称しており、その大部分でウイグル語による教育が行われている。ウイグル語による教育は、形式上初等・中等・高等教育まで一貫した学校教育体系を形成しているが、事実上は中等教育までに留まっている。表4・表5に示されているように、1986年、1995年、2000年を比較すると、民族語を教授言語とする学校の学校数と生徒数に大きな変化は見られない。また、高校になると新疆での少数民族生徒たちの在学人数は大幅に減っている。

また、3つの地域に分けて新疆の進学率をみる

表2 全新疆6歳以上人口の教育レベル別構成比（2000年）

文化レベル	人数	%	1990年を基準とした増加率および低下率(%)
小学校以上文化レベル	15,270,015	90.8	12.1
専科および大学	949,050	5.6	166.7
高 校	2,231,934	13.3	47.9
中 学	5,082,455	30.2	23.3
小 学	7,006,576	41.7	△2.2
非 識 字	1,026,360	6.1	—
総 計	16,816,945	100	—

注1) 総計は、新疆6歳以上の人口数字である。  
注2) 『新疆統計年鑑』1991年、94頁、『同』2001年、106頁より作成。

表3 全新疆6歳以上人口の地域別教育レベル別構成比（2000年）

文化程度	全 新 疆		北 新 疆		東 新 疆		南 新 疆	
	合計	%	人口	%	人口	%	人口	%
6歳及び6歳以上人口	16,816,945	100	8,019,327	100	958,387	100	7,839,231	100
非 識 字	1,236,037	7.3	487,623	6.1	59,781	6.2	688,633	8.8
小 学	7,006,576	41.6	2,635,102	32.9	362,947	37.9	4,008,527	51.1
中 学	5,082,455	30.2	2,733,965	34.1	304,511	31.8	2,043,979	26.1
高 等	2,231,934	13.3	1,425,345	17.8	159,623	16.7	646,966	8.3
専科および大学	949,050	5.6	663,536	8.3	55,753	5.8	229,761	2.9

注1) 『新疆統計年鑑』2001年、106頁より作成。

と、表6に示したように貧困地域である南新疆の進学率は著しく低い。

南新疆は、「改革・開放」後の社会の変化に教育体制が対応できていない状態のまま、授業料だけが市場経済の波にのせられて益々高くなり、農業を営んでいるウイグル人にとっては、どの学校を選択するかより、子どもを学校に行かせるか否かが切実な問題となってきた。さらに、教育財政の困難、教育内容の問題、教育体制の問題、教師の資質の問題、学校の不足及び設備の老朽化なども進学率の低さにつながっていると考えられるが、後述するような地方の経済的格差、階層格差

が、学校教育に対する親の意識の格差を生み出し、子どもの就学に大きな影響を与えていると推察される。

また、制度面の制約もあって、農村部では都市部とは異なる様々な問題が現れている。以下では、この点を現地調査に基づいて詳しく述べたい。

### 3・南新疆の不就学児童に関する調査報告と考察

#### (1) 調査の目的と調査地区の概要

##### 1) 調査目的

南新疆では、なお不就学が極めて多く、進学率

表4 学校別在学者及び構占比 (1986・1995・2000年)

年度	小 学 校 (人数)												
	総数	漢民族	%	ウイグル	%	カザフ	%	モンゴル	%	シボ	%	クルグズ	%
1986	1,948,151	828,154	42.5	909,778	46.7	171,669	8.8	18,152	0.9	3,553	0.2	16,749	0.8
1995	2,105,911	733,450	34.8	1,140,172	54.1	194,697	9.3	12,925	0.6	3,613	0.2	20,924	1.0
2000	2,477,413	938,536	37.9	1,330,065	53.7	171,629	6.9	9,533	0.4	3,290	0.1	24,360	1.0
年度	中 学 校 (人数)												
	総数	漢民族	%	ウイグル	%	カザフ	%	モンゴル	%	シボ	%	クルグズ	%
1986	762,307	518,411	68.0	188,246	24.7	44,688	5.9	6,810	0.9	1,829	0.2	2,323	0.3
1995	585,726	303,915	51.9	227,040	38.8	45,789	7.8	3,824	0.7	1,586	0.3	3,570	0.6
2000	934,273	373,066	39.9	476,459	51.0	71,035	7.6	4,788	0.5	1,877	0.2	7,031	0.8
年度	高 校 (人数)												
	総数	漢民族	%	ウイグル	%	カザフ	%	モンゴル	%	シボ	%	クルグズ	%
1986	261,191	182,587	69.9	56,777	21.7	17,283	6.6	3,035	1.2	955	0.3	554	0.2
1995	137,870	90,144	65.4	33,114	24.0	10,725	7.8	2,365	1.7	602	0.4	920	0.7
2000	198,639	120,693	60.8	60,619	30.5	13,661	6.9	1,870	0.9	570	0.3	1,226	0.6

注1)『新疆ウイグル自治区教育統計資料2001年』より作成。

表5 言語別学校分類数及び構占比 (1986・1995・2000年)

年度	小 学 校 (学校数)														
	総数	漢民族	%	ウイグル	%	カザフ	%	モンゴル	%	シボ	%	クルグズ	%	その他	%
1986	8,178	3,181	38.9	3,507	42.9	480	5.9	71	0.9	8	0.1	108	1.3	823	10.1
1995	7,117	1,947	27.4	3,733	52.5	792	11.1	67	0.9	9	0.1	92	1.3	477	6.7
2000	6,718	1,778	26.5	3,727	55.5	707	10.5	47	0.7	8	0.1	92	1.4	359	5.3
年度	中 学 校 (学校数)														
	総数	漢民族	%	ウイグル	%	カザフ	%	モンゴル	%	シボ	%	クルグズ	%	その他	%
1986	1,257	657	52.3	362	28.8	182	14.5	15	1.2	3	0.2	15	1.2	23	1.8
1995	1,244	541	43.5	447	35.9	143	11.5	18	1.5	3	0.2	16	1.3	76	6.1
2000	1,227	496	40.4	485	39.5	135	11.0	15	1.2	1	0.0	18	1.5	77	6.3
年度	高 校 (学校数)														
	総数	漢民族	%	ウイグル	%	カザフ	%	モンゴル	%	シボ	%	クルグズ	%	その他	%
1986	796	518	65.1	170	21.4	54	6.8	10	1.3	2	0.2	2	0.2	40	5.0
1995	586	333	56.8	166	28.3	56	9.6	10	1.7	2	0.3	5	0.9	14	2.4
2000	484	241	49.8	150	30.9	50	10.3	9	1.9	2	0.4	5	1.0	27	5.6

注1)『新疆ウイグル自治区教育統計資料2001年』より作成。

表6 地域別在学者及び進学率構成比(2000年)

	合 計		北 新 疆		東 新 疆		南 新 疆	
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
小 学	2,172,502	100	757,654	100	104,510	100	1,310,338	100
中 学	826,999	38.1	317,858	42.0	53,777	51.5	455,364	34.8
高 校	166,768	7.7	100,541	31.6	14,501	13.9	51,726	3.9

注1)『新疆教育統計資料』2000年、より作成。

注2)ここでの「進学率」は厳密な意味でのそれではなく、小学生数を100%とした場合の中学生、高校の対比割合。

も依然として低い。その原因として様々なことが指摘されているが、不就学問題は子どもの教育に対する親の教育意識とも関わっていると考えられる。親の教育意識に影響を与えるのは、一つは社会変動であり、もう一つは親の社会階層である。後者についていえば、ウイグル民族においても例外でなく、親の教育意識職業や収入などによって規定され、それによって子どもが就学できるか否かが決まってくるのではないと思われる。

本調査は、南新疆の不就学問題を明らかにするために行ったものであり、子どもの教育に対する親の態度を中心とした現地調査、および不就学児童の家庭への訪問調査からなっている。

調査地域は、南新疆の中心であるアクス地区、カシュガル地区、キズルス・クルギス自治州である。

## 2) 調査地区の概要

調査地区では、単一のウイグル族から成る地域が多いが、今回の調査対象地域であった三つの地区でも、ウイグル族の割合が一番多い。カシュガル地区だけで、全新疆のウイグル人の37%、カシュガル地区人口の89.7%を占める。アクス地区でのウイグル人は、全新疆のウイグル人の18.5%、アクス地区人口の74.4%を占める。キズルス・クルギス自治州でのウイグル人は、全新疆の3.4%、キズルス・クルギス自治州の63.9%を占める。この三つの地区だけで、全新疆のウイグル人総人口の58.9%、南のウイグル総人口の56.4%を占める。この三つの地区は歴史的にもウイグル人の宗教、政治、文化の中心であった。ウイグル族の多くは農村に居住しており、ウイグル族のみで構成される村も少なくない。このような民族

単一構成の農村は他の民族と交流する機会が少なく、閉鎖あるいは半閉鎖状態の社会経済文化体系を維持してきた。このような中、地区内でウイグル族とは異なる独自の社会を形成する漢民族とは、お互いに交流する機会がないまま対立的な関係が続いてきた。

## (2) 南新疆の初等・中等教育と不就学の現状

南新疆では児童の不就学には二つの形態がある。一つは、学齢に達しても入学しないものであり、もう一つは中途退学である。現在は、中途退学による不就学が非常に多い。

### 1) 初等教育

表7は、調査地区の初等教育の普及状況を示したものである。この表は、1990年から2000年までの10年間の状況を示しているが、地域的な在学率はあまり変わっていない。また、この数字には中途退学で学校に来なくなる子どもも含まれているので、正規の課程を修了して小学校を卒業していく子どもの率は実際にはさらに低くなる。各地区の教育所や学校長の説明では、小学校に入学した子どもが課程を修めて卒業する率は約50%、中学校では約30%であった。ここで、三つの調査地区の初等教育の具体的な問題点をみてみよう。

三つの地区の民族小学校は2種類に分類される。

- ①小学校：人口集中地に設立された比較的設備のととのった小学校で、児童が多く、全小学校課程履修の条件を満たしている。
- ②教学所：一般には人口が少なく、交通の不便な山村に分布しており、児童数が少ないため完全な小学校の条件を備えていない。

教学所での学習を修了した児童が勉強を続けたければ、他の小学校に転校するしかない。ま

表7 調査地区小学校統計表

年	在学者									
	南 新 疆		ア ク ス		キズルス・クルギス		カシュガル		そ の 他	
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
1990	851,175	100	209,185	24.5	53,957	6.3	331,621	39.1	256,412	30.1
1995	1,047,348	100	258,019	24.6	66,839	6.4	431,239	41.1	291,251	27.8
2000	1,310,338	100	295,946	22.6	78,672	6.0	576,538	44.0	359,182	27.4
年	在学者									
	南 新 疆		ア ク ス		キズルス・クルギス		カシュガル		そ の 他	
	学 校 数	%	学 校 数	%	学 校 数	%	学 校 数	%	学 校 数	%
1990	3,589	100	998	27.8	217	6.0	1,114	31.0	1,260	35.1
1995	3,695	100	1,053	28.5	230	6.2	1,169	31.6	1,243	33.6
2000	3,745	100	1,055	28.2	235	6.3	1,245	33.2	1,210	32.3

注1)『新疆統計年鑑』1990年、570頁、1995年、464頁、2000年、658頁より作成。

た、中学へ進学したくても、町の中学に寄宿させ、宿舎費や食費を払うことは貧しい山村の親にとって大きな負担であり、勉強を続けることは経済的・地理的に事実上不可能となっている。このような学校不足はこれらの地区の児童の進学率が伸び悩む原因となっている。山村では、自然条件や経済状況が貧困を生み出し、子ども達が教育機会をうばわれるという悪循環がある。

## 2) 中等教育

小学校を卒業した子どもたちにはそのまま中学校に進学する権利および義務があるが、上述のとおり、南新疆では初等教育段階がまだ十分普及していない。しかも中学段階での中途退学率は高いといわれている。とすれば、中等教育で学んでいる子どもは、ただ勉強が好きであったとか成績が良かっただけでなく、家庭の理解や経済的問題など様々な障害をクリアしてきている子どもであると推測される。

2002年現在の中等教育について、表8と現地調査で収集した資料をもとに見ていこう。表7の小学校在学者数に比べ、中学校と高校在学者の数が極端に少ないこと、また学校の数自体が中等教育段階では少ないことがわかる。つまり、南新疆では1988年に実行された義務教育法がほとんど効力を発揮していないといえる。

さらに注目すべきことは、中等教育を受ける子どもの割合の低さである(表8)。その大きな原因は在学中の退学の多さにある。中でも多いのは小学校の段階で中途退学していく子どもである。

もう一つの退学段階は中学から高校への進学時である。表にみる中学生数と高校生数の大きな格差はそのことを示している。むしろ表に示されている学校数と在学者数には南新疆にいる漢民族や他の少数民族の子ども達の数も含まれているが、上述したように、南新疆では82%の人口がウイグル民族である。このことから中途退学している

表8 南新疆および調査地区の中等教育統計表

年	学校別	在 学 者 数									
		南 新 疆		ア ク ス		キズルス・クルギス		カシュガル		そ の 他	
		人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
1990	中学	455,364	100	120,853	26.5	25,471	5.6	174,534	38.3	134,506	29.5
1995	高校	51,726	100	11,503	22.2	4,997	9.7	16,218	31.4	19,008	36.7

注1)『新疆統計年鑑』1990年、570頁、1995年、464頁。『新疆教育統計年鑑』2000年より作成。

子どもの多数がウイグル民族の子どもであると考えられる。

### (3) 不就学児童の家庭状況

#### 1) 経済状況

筆者が三つの地区で実施した調査では、不就学児童の家庭の経済状況をみると、家族は多いのに請け負っている土地は狭い。1戸平均の請負耕地は0.3haである。1戸平均の家族数は7人で、1人当たり耕地面積は0.1haにも満たない。

子どもを学校に通わせるためには半学期でも授業料を最低60元(780円)払わなければならない。4-5人の子どもを抱えている家庭では授業料と教科書代をあわせると、年間1000元(13,000円)近くになる。不就学児童農家の年現金収入調査の結果からすれば、農家にとって子どもの学費を払うことは大きな負担となっていると考えられる。

調査では、不就学児童の親の95%が子ども1人の学費が払えないと答え、5%の親は最大でも1人分までしか出せないと答えた。

- ・うちは耕地が少ない。しかし今より多くの耕地を請け負うお金もない。非常に貧しい状況が続き、いつも食べ物心配ばかりしている。(父親は小学校3年卒業、農民。母親は小学校卒業、農民。)
- ・高校に行けば学費が高くなる。そんなお金は家にはない。今の収入では子ども達を進学させる余裕はない。(父親は文盲、遊牧民。母親は文盲、主婦。)
- ・うちは非常に貧しくて、村の中でも貧しいと言われている。そんな状態で子どもの進学など考えたことがない。(父親は小学校3年卒業、農民。母親は文盲、農民。)

調査によれば、不就学児童の家庭は、貧困であるだけでなく、子どもが多く、子どもどうしの年齢が近い。何人もの子どもが同時に就学年齢になっていることが、子どもを学校へ通わせる経済的負担を負いきれない大きな原因となっている。

また、不就学児童の家族に借金があることも大きな原因の一つである。これらの地区ではほとんどの農家に借金があり、1戸平均の借金は2000元となっており、耕地灌漑費、耕地税費、農業費などによる借金が年々増加している。

- ・うちは借金がある。家族も多くて、食べる人も多い。子どもが働かないと生活が大変。(父親は小学校3卒業、農民。母親文盲、農民。)
- ・毎年現金収入が殆どなく、借金が増える一方で、返すことができない。(父親小学校4卒業、農民。母親文盲、農民。)

以上、不就学問題の現実の一端を検討してきた。その結果、当然ではあるが、不就学問題は本研究の目的であった親の現実的な「態度」と関わっていることが見えてきた。むろん、子どもの教育に対する親の態度に影響を与えるのは、大きくは親の職業や収入であり、それらによって親の教育意識が規定され、子どもが就学できるか否かが決まってきた。

#### 2) 階層からみる不就学問題

南新疆では、農業が主な産業で、就労先は行政機関や個人営業以外にほとんどない。また、行政機関などに就職することは漢語のあまりできないウイグル人にとっては厳しい。2000年の時点で南新疆では農民人口が90%を占めており、地区の中心地である小都市や鎮(町)で、行政職員や教員として暮らす人々はわずか10%である。つまり、南新疆は9割が農民で構成される農業社会であり、南新疆教育=農村教育(民族学校での教育)である。

筆者は調査地区で、すなわち南新疆の三つの地区で役人、教員の家庭5戸、農家20戸に対して家庭状況(親の職業、収入)にも注目して訪問聞き取り調査を行った。

不就学児童の少ないA市とC市で聞き取りを行った三つの世帯の親は役人、教員、医者であった。A市のある中学の校長の話では、ほとんどの子どもの親が「幹部」で<sup>(4)</sup>、次いで多いのは教師、労

働者であり、農民の子どもは少ないとのことだった。

それに対し不就学児童の多いA郊外、B県・B郷、C県・C郷では、ほとんどの家庭が「農家」であった。

不就学児童の親の教育レベルに関する調査によれば、学校へ通ったことがない父親は25.5%、小学校を卒業していない父親は45.2%、小学校を卒業は24.2%、中学校以上の学歴の父親は5.1%にすぎない。同様に、学校へ通ったことがない母親は61.2%、小学校を卒業していない母親は31.2%、小学校卒業は5.5%で、中学校以上の学校歴の母親はわずか2.1%にすぎない。このことから、学校に通っていない子どもの親の学歴は非常に低い。

南新疆の人口の9割が農民であることを考えれば、南新疆の不就学児童は農村地区の子ども達为中心であることが推定できる。

### 3) 子どもの教育に対する親の意識の変化と伝統的意識の存在

80年代の市場経済化にともない、少数民族地方にも様々な情報が入ってきた。ウイグル人社会においても、以前は制限されていた民族地域における商品経済が復活し、それに市場経済の原理が加わって、「バザール」(市場)に代表される新たな民族経済が形成され始めた。こうした状況はウイグル社会の人々の意識領域においても変化をもたらし、親の教育観に影響を及ぼした。

このような社会的背景から、子どもの将来に対する親の考え方に違いが生じはじめた。今回実施した調査で印象的だったのは、幹部にも農家にも共通して、「今後親が子どもに残せる唯一の財産は教育を与えること」だという意識がみられた点である。つまり、子どもを学校に入学させない親がいる一方で、現金収入が少しでもある家庭では、勉強ができると思われる子どもに対し、全財産をかけてでも大学まで教育を受けさせている。

・これから親が子どもに残せる唯一の財産は教育を与えてやることだと思います。子どもが中学

を卒業したら、上海の高校に行かせてやりたい。(父親は大卒、税務長。母親は専門学校卒、書店勤務。)

・子どもには良い教育機会を与えたいと思います。長女はいま都市の高校へ行かせています。毎年長女の学費のために5千円を払っています。

(父親は専門学校卒、中学の事務職員。母親は専門学校卒、小学校教師。)

このような親は、子どもを農村から脱出させ、豊かに暮らせるようにしてやるために、専門学校や大学まで行かせたいと考えている。しかし、専門学校や大学に入るためには入学試験を受けなければならない。農村部の民族学校で質の低い教育を受けた子ども達は、国家統一入学試験を受けても専門学校や大学には合格できず、また就職もできず、結局農家に戻るしかない。このような事実は、多くの農民に教育に対する失望感を抱かせるものである。したがって彼らの多くは、ある程度の読み・書き・計算を覚えたら、あとは早くから農業や手工業の技術を修得した方が結局は将来のためになるという考えを持っている。これは、非常に現実的な考えである。特に農村部では進学して高学歴をめざすことより、将来生計を立てるための技術訓練に力を入れる傾向が強まってきている。

・学校に行かなくても、学歴も何もいらぬ農家で畑仕事と家畜の世話をする。学校に行っても、やっぱり畑仕事と家畜の世話をする。高い金を払って、子どもを勉強させても、農民の子どもは卒業後就職できない。だから、結局農家に戻るしかないよ。(父親小学校4年卒業、農民。母親小学校3年卒業、農民。)

・農民の子どもは農民になるさ。勉強するより早くから農業や手工業の技術を修得した方が将来役に立つ。(父親は文盲、農民。母親は文盲、農民。)

さらに、国務院から発表された「農村からの採用(就職)は厳しく制限する」<sup>6)</sup> という通知が実

施されたことは、上記のような教育意識をもつ親の考えにかなりの影響を与えたのではないかと推察される。

また、新疆では、親のジェンダー意識が子どもの教育に大きな影響を与えている。例として、カシュガル郊外の農村に住む、ある世帯の場合を見てみよう。

- この世帯の主人である父親は57歳で、農業を営んでいる。その妻は42歳で主婦だが、農業が忙しいときは夫を手伝っている。子どもは、男子3人、女子2人の5人で、7人家族である。長男は中学1年生で中途退学後、自転車修理を習った。24歳になった今は、自転車修理工として独立している。次男は中学2年生で中途退学後、木業技術を習っている。長女は中学を卒業した後結婚した。今は主婦となり、夫と農業を営んでいる。この家庭では、次男と次女は中学校に通っているが、彼らには中学を卒業するまで学校で教育を受けさせ、その後、次男には将来生計を立てることができるよう何か技術を身につけさせたいと父親はいう。他方、次女には、中学を卒業後、相手がいれば結婚させたいと望んでいる。

女子に対しては、女性に教育を与えるべきではないとする伝統的な土壌がある。

- この村では、女の子が早く結婚しないと、人からいろいろ言われる。(父親小学校3年卒業、農民。母親文盲、農民。)
- 娘はもう14歳なので、結婚しなければならない。娘が勉強したいと思っても、それは彼女が決めることではない。(父親は文盲、農民。母親は小学校を卒業、死亡。)

親が男子を年少時より職業の修業に入らせ、進学させながら背景には、「改革・解放」政策開始後に復活した個人的な小規模商業や手工業生産などの民族経済がある。南新疆ではウイグル人

相互の需要・供給関係を中心とする、ウイグル人社会特有の経済圏ができあがっている。この民族経済圏では、絶えざる弟子入り教育によって、前近代的な職業技術者が再生産されるという構造が形作られており、近代的産業の労働に必要な科学技術知識の習得を学校教育において行う需要はほとんど生じない。

農村部では、自然経済と伝統農業の比重がかなり大きい。この社会では「自然就職」という就職方式が長年にわたり存在してきた。この就職方式のもとでは、人々は子どものころから畑仕事や手工業をし、学歴や正式な訓練がなくても、成長すれば自然にそれを生業とするようになる。そのため農民にとっては、職業を選択する機会もないし、また職業を選択する意識も持てない。

したがって農村社会では、子どもが中学生くらいになると親は学校をやめさせ、ウイグル人社会で通用するような伝統技術を身につけさせようとする。

- うちの子どもはあまり勉強ができなかったし、進学する必要はない。子どもが自分で生活できるようになるまで育てれば、それで十分ではないか。(父親は小学校3年卒業、農民。母親は文盲、農民。)
- 家が遊牧を営んでおり、家畜の世話をする人は子どもしかいない。(父親は小学校4卒業、遊牧民。母親は文盲、主婦。)
- うちの農家だから、収入が少ない。次男が小学校3年生のころに学校を辞めさせて、2年ぐらい自転車修理の技術を習わせました。その後、お世話になった先で3年間ぐらい働いて、今は自宅の一室で自転車屋をやっています。子どもはそれで自活できるようになったんだから、それでいいと思っています。  
(父親は小学校3年卒業、農民。母親は小学校を卒業、農民。)

こうした親たちの意識は決して偶然に生じた結果ではなく、社会主義市場経済が産み出した矛盾

が、社会・学校・家庭まで影響を与えた結果であるといえよう。

#### 4) 親の承諾に規定される子どもの将来—子どもへのインタビュー調査から

ウイグル人社会では、子どもが大きくなって何もできなければ親の責任だと見なされる。子どもが幼い時は母親が中心となつてしつけを行うが、就学などの大きなできごとに関しては父親の存在が大きい。父親は家族の生活を維持する責任者として権威をもっており、特に南新疆では、両親の考え方が子どもたちの将来に大きな影響を与えている。

ウイグル人の伝統的な家庭教育の文化は、近年、都市部では「改革・開放」政策のもとでの近代化が進み、変わりつつある。大都會ではしっかり勉強して、将来、知識人や社会的地位のある人になって欲しいと願う親も少なくない。しかし、ウイグル人が多く住んでいる農村地域、とくにイスラム文化のシンボリックな地域である南新疆の農村部では伝統的なしつけの文化が現在でもそのまま生きている。

今回子どもたちへのインタビュー調査では、親の考えによって子どもたちの将来が決められている事例があった。

A子は13歳の中学2年生で、良く勉強ができる女子である。A子自身も勉強は好きで、学校の教師もA子のやる気と才能から学校を続けさせたいと、授業料まで親の代わりに払うほどだった。しかし、A子の父親が学校に行かせようとしないため、学校をあきらめなくてはならない状況に追い込まれている。A子はこう話した。「私は、いつも朝学校に行く時、父からすごく怒られる。父は時々私を殴るんだ。その時は学校に行かない。先生が家に訪ねて来ると先生たちにも怒るんだ。私、学校に行くのが好き。勉強するのも好き」。

父親になぜA子を学校に行かせないのか訪ねたところ、「女の子は勉強する必要がない。家で家事をする者がいないからA子に家事をさせる。この子ももう13歳になったから来年あたり結婚しなければならぬ」と話した。

またA子について担任の教師は、「父親が、A子が学校へ行くのをすごく反対しているので、学費も払ってくれない。でも、A子は勉強が良くできる子だから、彼女の学費は今まで私が払ってきた。それでも、父親はこの子が学校に行くと、いつも殴る。それが心配で学校を辞めさせるともりだが、かわいそうだ」と話した。

この例以外にも、不就学の子ども達へのインタビューでは、95%の子どもが親によって学校を辞めさせられている。親に子どもの将来に対して何を望むかという質問をすると、ほとんどの親は次のように答えた。

「自分で生活できるように何か技術を身につけさせれば、それでいい。あとは神様がいるから、何とかなる」。

「子ども達には、神様が与えた運命がある。それは私に決められるものではない。子どもが自分で生活していくことができるようになればそれで満足です。」

親の承諾を得られない場合、子どもは学校に通うことができない。子どもが自分の将来に対してどんな希望を持っていても、その将来は、親の意識によって左右されていた。さらに、こうした親の意識は、彼らが置かれた社会経済的な状況に大きく規定されていた。

#### おわりに

本研究では、新疆ウイグル自治区社会の構造的特徴及びウイグルの地方間の格差についてまとめ、とくに「不就学の状況と親の教育意識」に焦点をおいた調査によって、人々の意識の格差、ウイグル人の子どもたちが受けている学校教育の現状や就学状況、中途退学の問題を明らかにした。調査の結果、地方間の経済的格差を背景にした学費の違い、就学児童の親と不就学児童の親の階層差、こうした背景を受けた各家庭の教育意識の違いなどがみられた。

現在、ウイグル農村部の親にとっての子どもに対する最大の心配は、子どもが将来どうしたら生活していけるかということであり、子どもに夢を

託せる状態ではない。そのため、親には子どもに対してどのような教育のチャンネルを選択すべきかという重い責任が課せられている。市場経済はウイグル人を極めて厳しい競争社会の中に立たせている。その中で、「『改革・開放』政策や近代化はわれわれに何の利益ももたらさなかった。」という言葉に象徴されるように、ウイグル人の親は自分たちに勝ち目がないことを自覚し、子どもの教育に関しても、高学歴を獲得させるより現実の社会に適応させる戦術をとっている。

新疆の農村部および南部新疆に集中して居住する大部分のウイグル人にとっては、中学以上の学校教育は知識や教養を身につけるためではなく、あくまでも出世するための手段、すなわち、子どもが歩むコースとして捉えられており、その他の多くの子どものはうまく機能しないものとなってしまっている。高校まで教育を受けても大学には合格できず、たとえ合格しても就職することが困難な状況は、学校教育に対する人々の意識を低下させ、教育に対する親の期待を薄めてしまっている。また農村社会では長年にわたって「自然就職」の方式が続いているため、親は子どもが教育を受ける必要性を感じない。現実の農村社会と学校教育につながりががないために、農民たちは学校教育の必要性を感じられないでいる。こうした状況が子ども達のチャンスをせばめていることは否定できない。

学校教育は農民に何を与えることができ、彼ら

の生活の中でどのような意味を持つのか。その答えは農民の生活の中から探すことができる。農村教育の問題点を理解するためには、彼らの生活環境、社会的位置、経済状況、伝統的観念、生産方式などを見ていかねばならない。今回の調査では、多くの教師達が現在の教育体制や不就学の状況に不満をもっていたが、彼らには現状を変えることが困難であった。農民の意識や行動が不就学問題や教育問題を大きく規定しているのだとしたら、彼らの生活実態や意識について詳細な調査を行い、その要因を明らかにすると同時に、こうした人々の声を聞き、世に送り出していくことが、研究者に課せられた任務であろう。

#### 注・文献

- (1) 筆者が1995年南新疆へ調査に行ったときのデータ。
- (2) 王珂「発展と民族問題」『新疆の経済発展とウイグル人のナショナリズム』、岩波書店、1998年。
- (3) カマリディン「改革・開放下の農産物市場構造の変化と農家の販売対応に関する研究（新疆ウイグル自治区の現状と課題）」2000年、260頁。
- (4) 中国の場合は「幹部」は、役人も「幹部」である。あとは行政機関の社員達も、工場の中の管理部門にいる人も「幹部」に入る。
- (5) この通知は1982年に発表されたものである。

(北海道大学大学院教育学研究科修士課程)